

# 竜巻災害 2 年後の取組み

## ～ 被災者からみた保健活動の評価 ～

岩田恵美子 太田尾香代子 片平久美 榎田恵美  
上原千枝 宮内麻理 日高良雄 内倉由美子  
精神保健福祉センター

はじめに

# 竜巻災害における支援

---

直接的支援

1 被災世帯全戸訪問

---

2 要支援者訪問

---

3 健康教育・健康相談・広報

---

支援体制の整備

4 関係機関との連絡調整

---

5 研修会の実施

---

# 竜巻災害における直接的支援

## □ 訪問活動

**被災後2日目～** 精神疾患・難病・母子の訪問



被災後6日目～ 個別訪問



(区長、訪問要請者、市営住宅への避難者)

被災後11日目～ 全戸訪問



(健康状況調査、こころのチェックリスト使用)

**被災後4週間目～** 要支援者訪問

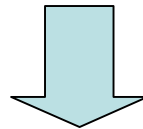
(IES-R使用)

## □ 健康相談活動

被災後87日目～：夜間健康相談(3ヶ所)

# 調査（研究）の目的

- 自然災害の中でも、竜巻災害時の支援についての研究は少ない。
- 今回の活動が住民の支援に繋がっていたのか評価が必要。



被災者が保健活動に対してどのような評価しているかを知り、今後の保健活動の参考とする。

# 調査（研究）方法

# 調査方法

- 対象者：要支援者のうち131名  
（市外転居者・死亡者を除く、  
未成年者の場合保護者1名に依頼）
- 調査期間：2008年12月から2009年1月まで
- 調査方法：訪問にて調査依頼し、郵送にて回答

# 調査項目（調査票一部抜粋）

## 保健師訪問の役立ち度

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1 とても役に立った | 2 少しは役に立った  |
| 3 役に立たなかった | 4 訪問を受けなかった |

## 訪問時期の評価

- |        |             |
|--------|-------------|
| 1 よかった | 2 早かった      |
| 3 遅かった | 4 訪問を受けなかった |

## 適当な訪問時期

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1 災害後2週間以内      | 2 災害後2週間から1か月以内 |
| 3 災害後1か月から3か月以内 | 4 訪問は希望しない      |

## 健康相談会の希望形態

したら、どのよつな相談会が良いいとお考えですか。

- |              |                   |
|--------------|-------------------|
| 1 各区ごとの健康相談会 | 2 災害時の総合相談窓口で健康相談 |
| 3 夜間の健康相談窓口  | 4 健康相談会は希望しない     |
| 5 その他（       | ）                 |

# 統計解析

## □ 検討内容

- ・ 「保健師訪問の役立ち度」と「訪問時期の評価」との関係
- ・ 調査結果（訪問に関する項目）と回答者の基本的属性との関係

## □ 統計手法

- ・  $\chi^2$ 検定、Fisherの直接確率計算法
- ・ Mann-WhitneyのU検定

# 結果

# 回収数及び解析対象者

- 回収数

92名（回収率；70.2%）

- 解析対象者

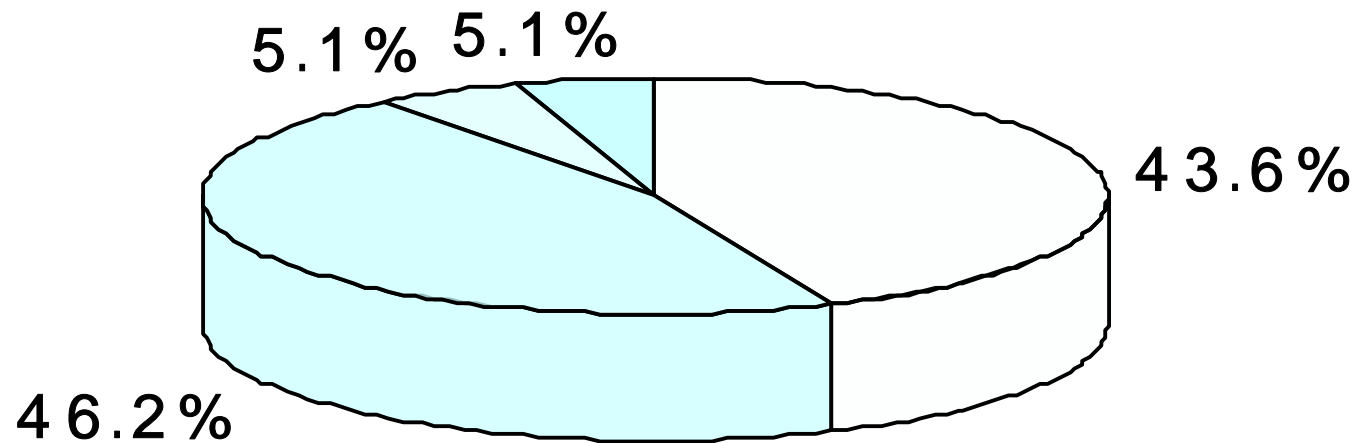
上記のうち記述に不備のない178名  
（有効回答率；59.5%）

# 回答者の基本的属性

n=78

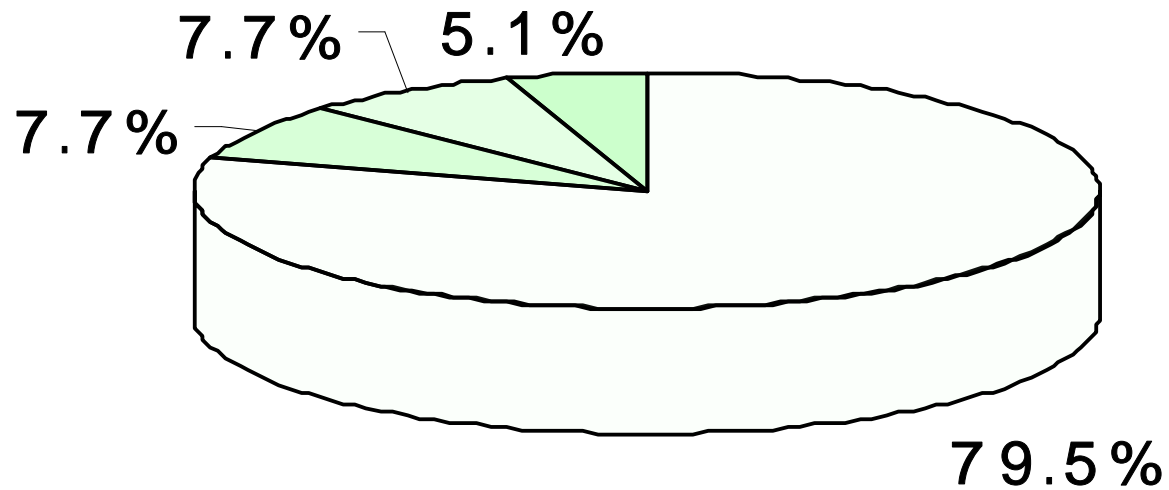
性別	男	18 (23.1%)
	女	60 (76.9%)
今回調査時の平均年齢		65 ± 14.1
家屋の被害	全壊	11 (14.1%)
	半壊	33 (42.3%)
	一部損壊	28 (35.9%)
	不明	6 (7.7%)
竜巻による外傷	あり	12 (15.4%)
	なし	63 (80.8%)
	不明	3 (3.8%)
被災時家族構成	単身	20 (25.6%)
	同居	58 (74.4%)
被災時の動向	在宅	12 (15.4%)
	外出	63 (80.8%)
	不明	3 (3.8%)

# 保健師訪問の役立ち度



- |                                   |                                    |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> とても役に立った | <input type="checkbox"/> 少しは役に立った  |
| <input type="checkbox"/> 役に立たなかった | <input type="checkbox"/> 訪問を受けなかった |

# 訪問時期の評価



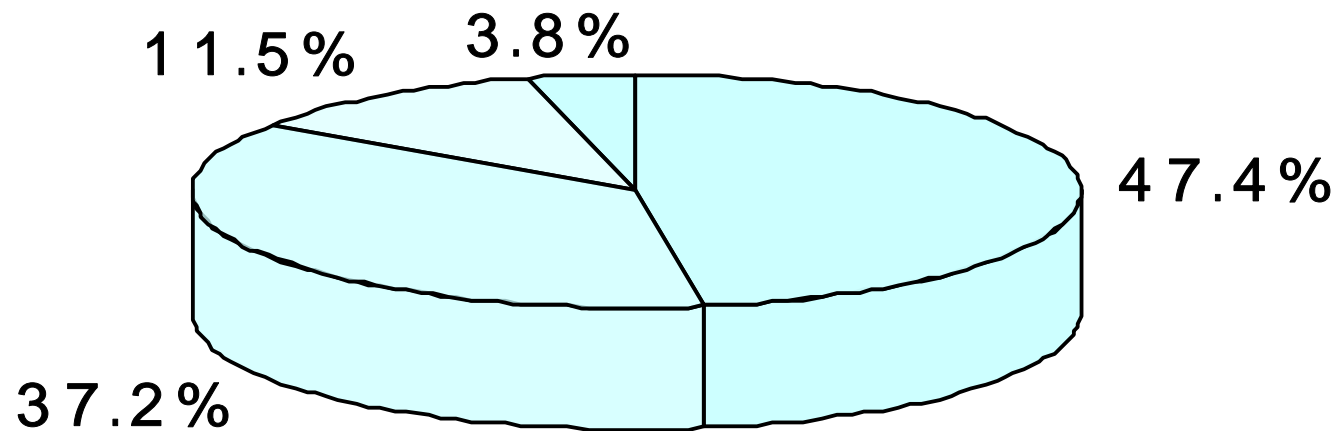
よかった

早かった

遅かった

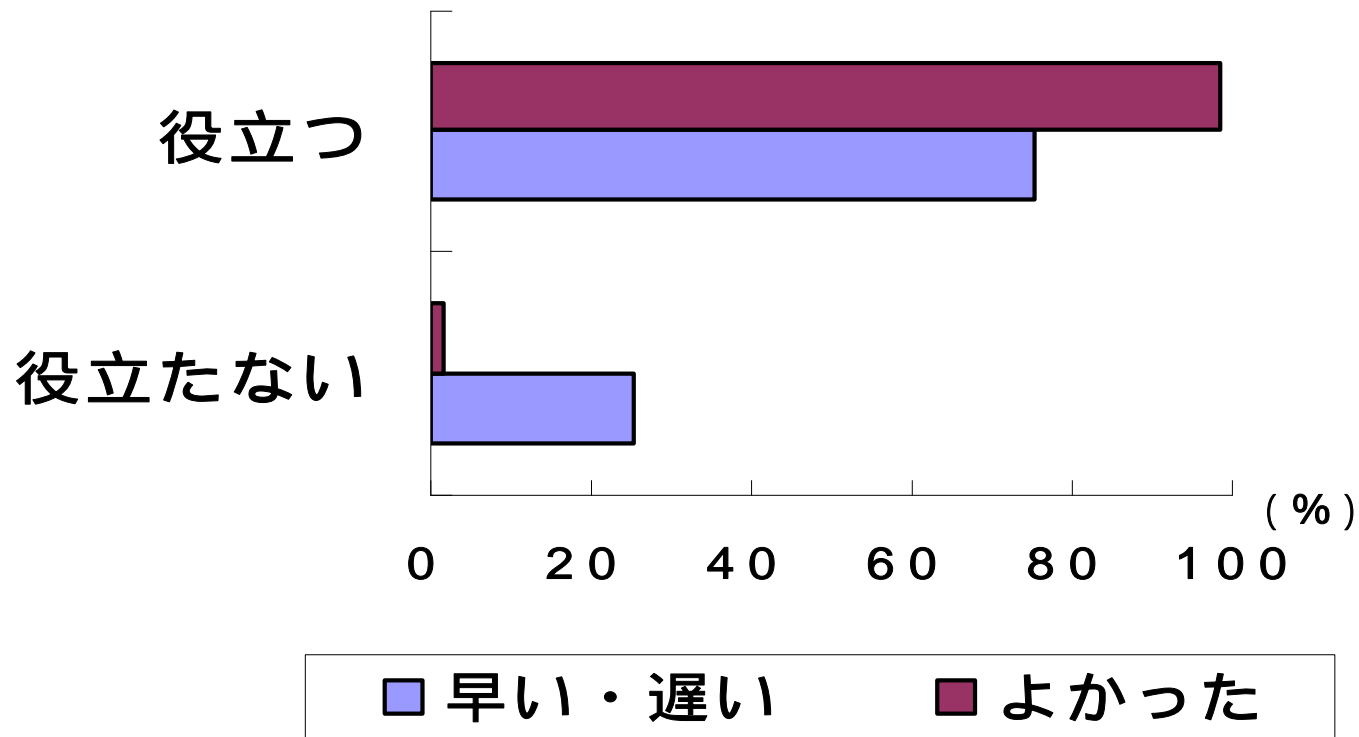
訪問を受けなかった

# 適当な訪問時期



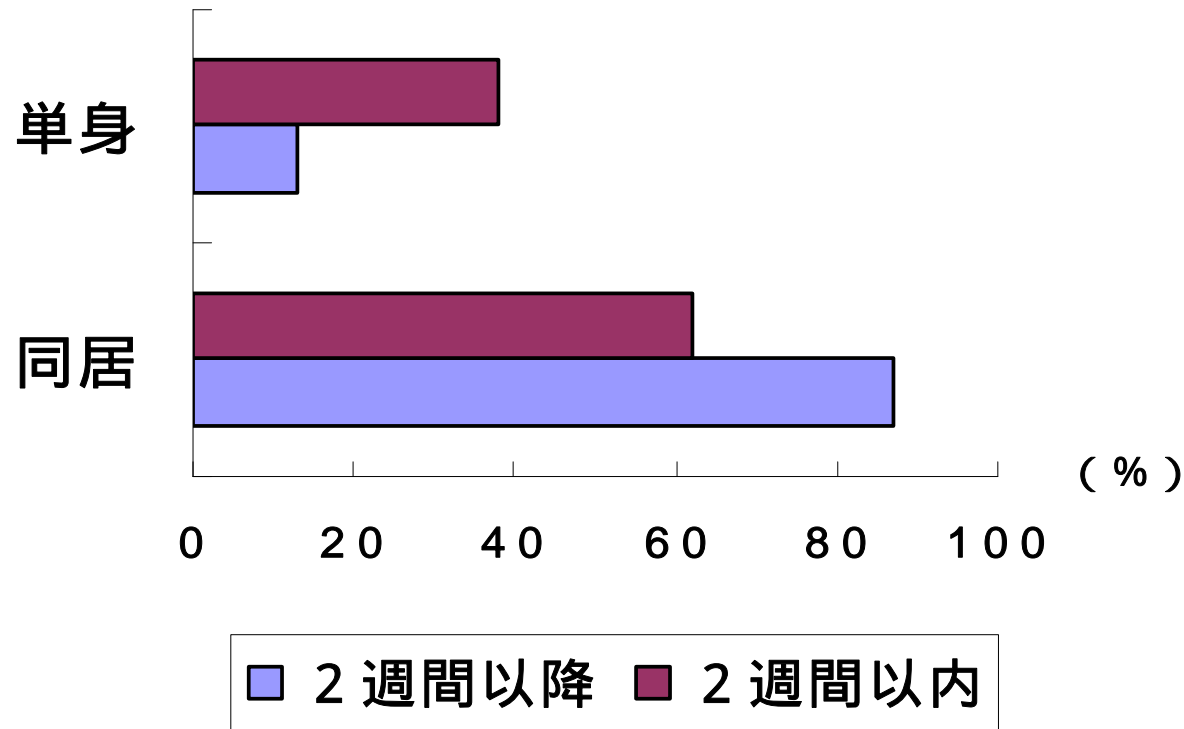
- 災害後 2 週間以内
- 災害後 2 週間から 1 か月以内
- 災害後 1 か月から 3 か月以内
- 訪問は希望しない

# 「保健師訪問の役立ち度」と 「訪問時期の評価」の比較



訪問時期がよかったと感じている人は  
保健師訪問の役に立つと感じている。(p=0.01)

# 「適切な訪問時期」と 「災害時家族構成」の比較



単身の方が、2週間以内の訪問を適切だと感じている。(p=0.02)

# 考察

# 保健師訪問について

- 今回の訪問時期は適切だった  
関係機関との連携と役割分担があり、早期の全戸訪問が実現した。
- 適切な時期の訪問が、被災者の役に立つ  
住居の確保が早く避難所の必要がない、被災家屋が限定され被災体験を共有できない場合、早期の訪問が必要である。
- ひとり暮らしの高齢者が早期訪問を希望  
災害時要援護者には、早期の訪問が必要である。

まとめ

□ 被災者へのアプローチの基本はアウトリーチ・サービスであり、保健師の重要な役割である。  
今後の被災者支援に活かしたい。

□ 災害時要援護者支援マニュアルの多くは、保健・福祉の連携は、被災前準備や避難所での活動に限られている。

被災時の地域で生活する被災者への支援についても、明記されることを期待

おわりに

# 訪問を通して感じたこと

- 被災状況を知り、被災後の思いについて共有することができた。
- 外傷後成長（Posttraumatic Growth）の過程を知ることができた。